

の空間的パターンの変遷に関して資料③(青木)「日本の鉄道網の発達」はその全般的な概観を効果的に行なっているのが注目される。さまざまなタイプの鉄道史をもつ英国には、『英国鉄道の地域史』(Thomas, D. St. J. & Patmore, J. A. eds.: A Regional History of the Railways of Great Britain. 14 vols. David & Charles, N.A. 1961~83, ただし、最終巻の第15巻は準備中)という鉄道史が刊行されている。一般のアマチュア向けの性格も有していて、鉄道史として高度のレベルを目ざしたものではないが、空間的視点に立って英国の鉄道史を地域ごとに分冊の形でとりまとめており、わが国でもこのような体裁をもった鉄道史の出現が待ち望まれる。

概説書であるため、ディテールを極力捨象した叙述方式がとられざるを得ないのは当然であり、このためマクロな方向に傾くのは止むを得ないことである。空間的視点の尊重というのはミクロな地方的ディテールをいちいちとりあげるといふことでは決してないが、沖縄本島や淡路島の鉄道についてはモータリゼーションによる初期の廃止鉄道としてふれる価値があると考えられ、また資料的な制約はあろうが樺太の鉄道についてもふれてほしかったと思う。

巻末に掲げられている年表については私鉄関係のものや、鉄道以外の主要関連事項(例えば高速自動車道など)がもう少し盛り込まれた方が便利であり、また明治5年までは日本史学が一般にそうしているように旧暦のままの月日を採用する方が適当のように考えられる。なお、本書についての他誌における書評の中ですでに言及されていることであるが、索引はぜひ必要であり、また章や節の末尾に随時コラムとしてとりあげられている「人物紹介」は、頁を追って本文を読み進んでいくとき却って思考を中断・散乱させることになるので、別に章節を立てて一括していただきたいかった。

以上思いつくままに望望の言辞を弄したが、このことが本書の価値をなんら減じるものでないのはむしろ、わが国における鉄道史の研究に偉大な足跡を残すものとして高く評価されることであろう。

(木村辰男)

オギュスタン・ベルク著(宮原信訳)

空間の日本文化

筑摩書房、1985年6月

B6判、291ページ 2,000円

本書の著者(フランス国立社会科学高等研究院教授、日仏会館フランス学長)は、これより先に、L'espace Géographique 誌の日本特集号(IX-2, 1980)にも執筆しており、日本の空間構成に関心を寄せていた。本書の原著は1982年にフランスで出版されているが、「日本語版」の構成とは若干異なっている。2部構成の原著のうち、第1部は序文に簡略にまとめられ、第2部以下が本書の中心になっている。広く日本で読めるようになったのを機会に、改めて本欄で紹介する。フランス人という「外の目」に映る日本の空間は、「内の目」をもつ者にとって大きな刺激となろう。

本書の構成は以下のようになっている。

#### I 環境に置かれた主体 空間の精神的組織化

- 1 主体は適応可能である
- 2 象徴は有効である

#### II わがものとなった列島 空間の技術的組織化

- 1 広がりは集中しうる
- 2 空間は面的である

#### III 国土の一体化 空間の社会的組織化

- 1 決定的に重要なのは細胞
- 2 隣が標準である

#### 結論 日本の範列

本書は、空間の質は「主体が客体に対して自らを定義する方法によって決定される」という考えをもとに、主体と客体との関係の認識論的議論から始まる。第I部では、*subject*(主体、主語、主題、主観)と、他人や世界などの客体との「境界の位相」を明らかにすることに主眼がおかれる。言語化程度が相対的に少ない、したがって「主体をその環境からできるだけ離すまいとする」擬声語、擬態語の多用。文脈によって変化する多様な人称、主語と述語の関係、ヤマトコトバにおける「自然」概念の不在など、日本語では主体と客体との区別が必ずしも判然となされてはいないことを述べ、「主体の状況依存的傾向」を指摘する。

次に、空間それ自体を意味づけるメタファーとして、「間」や「縁」の論理が指摘される。「間」、すなわち「意味をになった間隔の設置」によって空間にリズムが生じ、「縁」によって異なるもの(A、B)の接触が仲立ちされ、AでもなくBでもない「第3の媒介項」の機能が果たされる。また、習慣(コンセンサス)による均質的場を前提として、書体の「真行草」などに見られるような簡略化、公式

化、さらには日本家屋（例えば畳）に見られるような標準化などの象徴化作用も同時に指摘する。そこから、実質よりも相対的に形式を重んじる形式主義が生じるとする。この形式主義は、日本の空間構成のいたるところに顔を出す。以上のことは、多くの日本文化論でも指摘されていることであり、とくに目新しい内容を含んでいるわけではない。しかし、簡潔に要領よくまとめられ、地理学者としての著者の面目躍如たる第Ⅱ部のよい「導入」部となっている。

第Ⅱ部では、現実の空間の利用や構成の方法について論じられる。それによれば、水田は最良の土地を占有し、その拡大は畠の水田転換による場合が多く、他の作物の犠牲の上に成り立っている。また、作付の時期も稲作が優先的に決められる。稲作は、他の作物よりも空間的にも時間的にも優先されている。さらに、労働力の配分も水田中心に行われ、余剰がなければ他の作物の耕作は放棄さえされる。日本においては、水田耕作に集中し集約的経営によって生産性が高められ、耕地の外延的拡大の志向は稀薄であるとされる。日本に森林が比較的未開発のままに残っているのもそのためであると言う。そして、この集中によってそれまでの世代が作り上げてきたもの（例えば灌漑施設）は、自然の一部と考えられる。自然とは人間の構築する自然である。こうして、「構築されたもの」と「野生のもの」とのあいだにメタファーが可能となる。

都市プランにおける、枢軸となる大通りや直交街路などの幾何学的パターンの少なさ、建築物における「破調」、古地図における表記方向の多様さ、行基図の房状の構図、それらはいずれも全体を統括するパースペクティブを欠くと言う。「空間は、具体的体験時に、具体的な瞬間に現れるそのままの姿で概念化されるのである。」

ただ、著者が地図を語るとき、地図の見方にわれわれとの大きな違いを感じないわけにはいかない。著者は、地図における記号の表記方向の多様さを、地図を畳においてその周囲から何人もの人がそれぞれの方向から見ることによると考える。すなわち地図そのものを突き放して見ている。しかし、「我々日本人」は地図のなかに入り込む。いわゆる「臥遊」である。したがって、表記方向が多様なのは、見る者が移動してそれぞれの地点で風景を見るからである。空間の表現法が根本的に異なるのである。これは、たんなる表現にとどまるものではない。ほか

らも著者自身が後で述べているように、空間の概念化に基づくものである。

日本家屋の二重性（庭園に対する家屋のより少ない閉鎖性と、近隣に対する庭園のより強度の閉鎖性）や、人口密度、家屋構造、人工度などの点からみてヨーロッパほど都市との対立が際だっていない田園部の存在は、日本における中間地帯の存在を示す。「前景」と「背景」をつなぐ中間地帯——「中景」——の存在（見えないという存在）を前提とする「借景」も、これと同じ原理であると言う。このように、日本では、「間」の論理に通じる中間地帯が、内側を包み込んでいる。この中間地帯の設定が、日本的な空間を生み出す。大切なものが包み込まれ、視線から隠され、迂回しなければ到達できないようになっている。そこに、進行と迂回の観念に伴う「おく」行が生じる。運動の1つの形式が、広がりという内容を与えるのである。

ここで著者は、人生観における「流れ」の観念に対比しつつ、日本的空間構成を運動力学的とする考えにくみする。各部屋ごとの位相関係だけが規準点となり、外的規準が不明確な江戸城や、廻遊式庭園の「隠顕」におけるように、移動に沿ったその場その場の視野に応じて、固有の場所が発生する。このようにして継起的に発生する場所をむすび合わせる場は、境界域としての意味をもち、次の場所への状況適応の機能を果たす。これは「縁」の論理に通じる。

第Ⅲ部では、人間の相互関係の構造に関して考察する。まず、「わたし／わたしたち」、「家」、「内側世界＝所属集団」の同化作用から、「うち」観念、さらに「うち／そと」の対立関係が述べられる。「うち」集団は、家から国「家」全体にいたるまで、様々なレベルで存在する。農村共同体(村)、都市内での「農村共同体」というべき町内会、家族風の会社は、その例である。日本の社会は、幾重もの「うち」の入れ子構造になっているのである。

これらの細胞集団を総体としてまとめるものとして、ある「うち」領域から他の「うち」領域へのコミュニケーションを媒介する「縁」、公的なものが私的なものの上であり、かつ侵入してくるという「公私」の観念、日本人の行動を強く支配する「世間」（「世間指向性」）、高次の秩序を取り込んでくる共同体の首長の存在（「中央指向性」）、企業の機能性を追求するためのコンセンサスの達成、人間関係が円滑に運ぶための順応すべき原則である「建前」、な

どが指摘される。

本書は、フランス人向けに書かれたためか、事例の説明が繁瑣で、取り上げ方も必ずしも適切ではない感も否定できないが、それによって本書の価値が少しも減ぜられるものではない。本書の意義は、認識論的レベルから現実的空間レベル、さらに社会的レベルでの検討を踏まえて、日本の空間文化を包括的、体系的に捉えようとしていることであろう。

空間が文化的に構成されるものであることは、異論のないところであろう。地理学は、文化景観という術語をもっている。しかし、その空間を構成している、それぞれの文化のなかにおける「地理のことば」は、われわれの手元は必ずしも豊富ではない。「地理のことば」の辞書がよりいっそう充実することが期待される。

(青山 宏夫)